

1. 喜多川周之コレクションとはなにか

行吉正一*

1. 喜多川周之コレクション

皆さん、こんにちは。今日は多くの方に来て頂いて、大変うれしく思っております。私は、東京都江戸東京博物館の学芸員の行吉と申します。いよいよ12月になり、本格的な冬になってきましたが、今からちょうど120年前の初冬、1890年（明治23）の11月11日、浅草公園の外の北側に凌雲閣、「雲を凌ぐほど高い建物」という意味ですけれども、通称「浅草十二階」という娯楽施設が開業致しました。10階までは煉瓦造りで、11・12階が木造です。民間の娯楽施設で、お金を払って入るんですけれども、各階ではお土産物売っており、11・12階は展望階になっておりました。しかし、今はもうありません。関東大震災で倒壊してしまいましたが、33年間、東京最大の盛り場、浅草のシンボルとして建っておりました。その凌雲閣、浅草十二階に魅かれて様々な資料を集め、そして研究をしたのが今日これからお話致します、喜多川周之さんです。喜多川さんは1911年（明治44）、文京区の千石でお生まれになって、神田で育ち、小学生の頃から浅草に関心を持ち始めました。以来、ずっと浅草に関心を持ち続け、1986年（昭和61）、75歳で亡くなりました。当館は亡くなられた翌年、翌々年にかけて、ご遺族の方のご協力、ご理解によって、喜多川さんが集められた資料の殆どを収集致しました。その中核になるのは凌雲閣、浅草関係のものですけれども、その数35,000点です。当館が、その資料を収集したのは開館前でして、常設展示をどういうふうにしようかという検討をしていた時期でしたので、喜多川さんの資料をもとに凌雲閣の10分の1の模型を作りまして、展示を致しました。皆さんの中には、当館の常設展示室内で、ご覧になった方も多と思います。

はじめに、凌雲閣についてお話を致しますが、喜多川さんが集められた凌雲閣関係の資料を紹介しながら、ご説明を致します。

これは、凌雲閣の煉瓦破片です（口絵1）。1981年（昭和56）、浅草の焼き肉屋さん「幸楽」、「幸い」に「楽しい」と書くんですけども、その新築工事の際、地中から凌雲閣の基礎部分の一部が、偶然ですが出てきました。これはそのときに得られたものではないかと思うんですけども、それを喜多川さんは収集されています。今、常設展示室で、特集展示として、喜多川周之コレクションの一部を展示していますので、ぜひご覧になって頂きたいと思います。先ほど、凌雲閣は浅草のシンボルだと言いましたが、震災で倒壊した後、ここに凌雲閣が建っていたのだという記念碑が建つわけではなく、また色々な資料がどこかに保存されていたわけでもなく、民間の施設ですから、そのまま段々と忘れ去られてゆきました。これは、「幸楽」の工事の際の発掘現場の写真（口絵88）ですけども、このとき、改めてここに凌雲閣があったんだということが再確認されたわけです。

ここが発掘現場で、凌雲閣のほんの一部が発掘されただけなんですけれども、これが浅草の「国際通

* 東京都江戸東京博物館 学芸員

り)、左に浅草の「ビューホテル」。右の方に「花やしき」とありますから、この「花やしき」の右下が「浅草寺」の本堂になるわけです。凌雲閣は、こういう位置に建っていたということです(図1)。喜多川さんは、この発掘現場には毎日通われたそうで、きっと、非常に喜ばれたことだろうと思います。

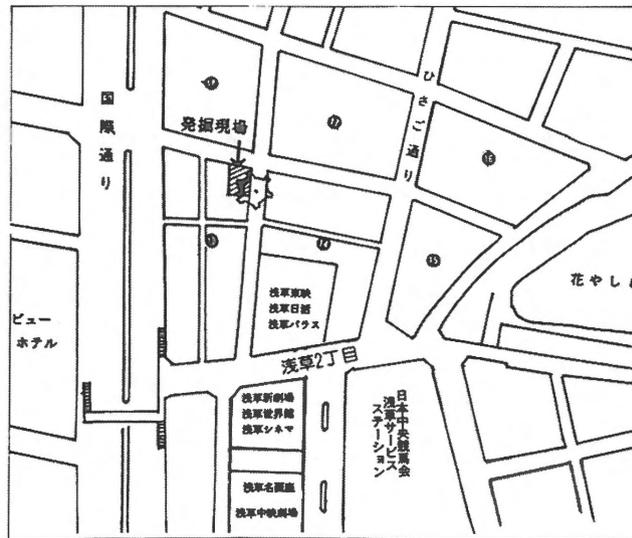


図1：凌雲閣のあった場所(『台東区文化財調査報告書第5集 浅草六区 興行と街の移り変り』1987)

喜多川さんはこの凌雲閣についてだけではなくて、実はその前史についても調べておられます。高いところに上って周りを見て楽しむという施設、「高所高覧施設」と喜多川さんは、呼んでいらっしゃるんですけども、凌雲閣の前にもいくつかあります。これは「浅草寺」の五重塔が修復を受けたときの錦絵ですが(口絵3)、その修復の足場に、人を上らせて周りを見てもらい、お金を取ったわけで、これは非常に好評だったようです。あるいはこれは木造の「富士山」です(口絵6)。右の方に「浅草寺」の本堂が見えますが、その西南側に高さ約32mの木造の「富士山」、こういうものができまして、この周りをぐるぐる回って頂上まで登るわけです。これが実際の写真なんですけども(口絵4)、実際の写真を見ると、何て言いますか、プリンのような形をしていたものということが分かります。これは大阪にも飛び火をしまして、大阪でも「浪花富士」というのができたそうです。さらに、大阪では5階の「眺望閣」(口絵9)という建物が建つ。そして、9階の「九階凌雲閣」(口絵8)。「凌雲閣」という名前は大阪の方が最初なんですけども、こういうものが建ち、人気を博するわけです。こういう前史があって、それで浅草に凌雲閣が建った。これは喜多川さんの資料の中でも非常に有名なものですが、凌雲閣の中の様子が分かる双六になっております(口絵16)。下から段々上に上がっていくというものです。これは3枚続きの錦絵ですが、「浅草寺」の本堂があって、その左奥に、凌雲閣が控えております(口絵13)。

この凌雲閣を設計したのはイギリス人のバルトンという人です。いわゆる「お雇い外国人」で、東京帝国大学で衛生工学を教えた人です。バルトンは、上下水道の専門家で、日本の上下水道の近代化に非常に貢献した人です。また、優れた写真家でもあって、日本の写真史の進展にも大きく寄与した人です。この写真では、バルトンは、和服を着て居ますけども(図2)、奥様は荒川マツさんといって日本人です。



図2：和服を着たバルトン（10870491）

凌雲閣の開設当初、一つの呼び物を用意しました。それは、電動式のエレベーターです。これは凌雲閣の銅版画なんです（口絵10）、この右の方に、2機、エレベーターが上下している様子が分かります。ただ、このエレベーター、故障が続きまして、半年ぐらいで当局によって停止させられたそうです。1914年（大正3）にはまた再開するんですけども、開設時には、こういうエレベーターがつけられていました。この銅版画には、「喜多川周之 複写」とありますが、喜多川さんの職業は「石版画工」というものです。画像の印刷をする際、今のように写真がきれいに印刷できるというわけではなかったもので、絵や地図なんかは石版の版に職人さんが、原画を描き写すんですけども、喜多川さんは、その腕の良い職人さんでした。

さて、これは凌雲閣の開業のときのチラシです（口絵22）。「必ず凌雲閣に登れ」という威勢の良いキャッチコピーがありまして、その裏にもやはりエレベーターがついております。エレベーターは一つの呼び物であったわけですね。ただ、これがすぐダメになってしまう。次の手が早速打たれます。それは、「百美人投票」というものです。新橋など、東京の芸者さん100人の写真を撮りまして、その写真を凌雲閣の中に掲げる。そして、誰が一番かという投票をさせるんですけども、これが非常に当たりました。凌雲閣は、このように様々な仕掛けを掛けながら、お客さんと呼んでいったわけですけども、喜多川さんは、凌雲閣が栄えていたのは精々、開業して5年程度と言っております。明治の後期には、浅草には映画館がたくさん建ち並びますし、大正時代になると「浅草オペラ」という大衆オペラが非常にブームになりますし、凌雲閣はだんだん廃れていったというわけです。明治時代の後半には、凌雲閣の上から飛び降り自殺をする人が出てくる。つまり、凌雲閣の展望階にあまり人がいなかったのではないのでしょうか。誰かいたら「おい、やめろ！」と、飛び降りるのを止めさせることができるわけですけども、人が少なければ、そのすきに、飛び降りることができるわけです。あと、この地図にありますけれども（図3）、これも喜多川さんが描いた地図なんですけども、凌雲閣の下に、私娼窟ができてくる。「十二階下」と



図3：浅草十二階下新道横町一覽
〔愛書家くらぶ〕第2号 1966) (87520040)



図4：福助足袋広告をつけた凌雲閣
〔日本古書通信〕第40巻第9号 1975)

呼ばれたりするのですが、凌雲閣の近辺は、あまり良いイメージじゃなくなる。また、凌雲閣の下には「十二階劇場」という劇場を作ったり、また、こういうふうに「福助足袋」という大きな看板が掲げられていますけども(図4)、看板塔として貸し出したり、経営的には色々な工夫をするんですが、厳しい経営であったようです。そして、関東大震災で途中からこうやって折れてしまう。そして、このまま建っていたのでは危ない、ということで、工兵が爆破してしまいます。本当に大まかですが、これが、凌雲閣の一生です。浅草のシンボルということではあるんですけども、経営的には、内実は非常に苦しかったようで、最後の時期は、イメージも必ずしも良いものではなかった。そして、関東大震災で倒壊するなど、「悲劇の塔」というとちょっと大袈裟かもしれませんが、非常に苦難の道を歩んだわけです。しかし、関東大震災で倒壊して、凌雲閣自身は、実はホッとしたんじゃないかなという感じが私には致します。「やっとこれで生涯を終えられた」という感じがしたんじゃないかなと思うのですが、喜多川さんはどういうふうに思われていたのでしょうか。

2. 絵葉書

さて、ここにあるのは凌雲閣の絵葉書です(口絵24)。凌雲閣の記念のスタンプが押されていますけれども、次に喜多川さんが集めた絵葉書についてお話を致します。

喜多川さんの凌雲閣研究というのは、凌雲閣を写した絵葉書の収集から始まったと言っても良いかもしれません。それは、絵葉書が、安価なものだったからなんです、その背景には、明治末期の日露戦

争時代から大正時代にかけて、絵葉書は画像を伝達するメディアとして非常に隆盛を極めており、当時は、多種多様な絵葉書がたくさん、社会の中に出回っていたということがあります。今からでは想像もつかないんですけども、凌雲閣や浅草を撮った、あるいは、描いた絵葉書というものはたくさんあって、喜多川さんは、それらを収集することで凌雲閣研究、浅草研究を始めたということなんです。ただ、喜多川さんの絵葉書を見ていると、研究用の資料としてだけではなくて、もう、収集のための収集を行うコレクターの域に達していたという感じがします。2万枚の絵葉書を喜多川さんは集めて、それらを当館は引き継いで収蔵しました。では、いくつか見てみましょう。



図5：東京名所浅草公園花屋敷 (88132952)



図6：(東) 凌雲閣ヨリ向島及び本所方面ヲ望む (88132880)

これは「花やしき」から見た凌雲閣すね (図5)。これは逆に凌雲閣の上から見た風景です (図6)。左上に浅草寺がありますけども、こうやってみると凌雲閣の高さというのがどのくらいであったかというのが、具体的にわかりますね。高過ぎずもせず、低過ぎずもせずといった感じがします。これは「仁丹」の広告が前に出ているものです (口絵26)。これは上から見た航空写真で、ここが凌雲閣なんですけども、この右の方に建物が食い込んで建てられていますけど、凌雲閣劇場でしょうか (口絵27)。そして、凌雲閣の倒壊 (口絵28)。これは罹災した親子が立って、呆然として立っていますけども、これをよく見ると、足下が何か不自然なんです。おそらく、合成写真じゃないかなという感じがするんですが、絵葉書は、よく気を付けないと誤った情報もいっぱい入っています。それだからこそ楽しいと言えば楽しいんですけども、いずれにしても、凌雲閣関係の絵葉書はたくさんあります。その他、名所を撮った「名所絵葉書」、上野公園 (口絵32)。あと、「記念絵葉書」といって、〇〇記念10周年とか20周年とかありますよね、そういうときに出したもの (口絵45)。これは、万国郵便連合加盟二十五年祝典記念の絵葉書です。あと、「細工絵葉書」といって、箱根の寄木細工そのものが絵葉書になっています (口絵63)。植物標本を貼った絵葉書 (口絵60)。これは日比谷公園の正門前がただ描かれているだけの絵葉書なんですけども、後ろから光をかざすとこう人々が何か騒いでいる。これは日比谷焼き討ち事件の時の様子を表したものと云われております。「透かし絵葉書」といいます (口絵64)。「時事絵葉書」といって何か事件とか災害があったときに出す絵葉書。1910年 (明治43) という関東一円大洪水が起こった年なんですけども、本所亀沢町は、当館のすぐそばです。墨田区一帯が、浸水したわけですね (口絵38)。あと、「美人絵葉書」 (口絵53)、「美術絵葉書」 (口絵56) などがあります。こういうふうになん千の絵葉書を集められた。絵葉書コレクターとしても喜多川さんの名前は記憶されていいと思います。

3. 喜多川周之氏の略歴

ここで喜多川さんの略歴というのをちょっとお話します。お配りした資料に詳しいものを付けたんですが(年譜)、これはまだ作成途中のもので、誤りなどあるかもしれませんので、後で教えて頂ければ、有り難いと思います。

喜多川さんは1911年(明治44)に生まれて、小学校は神田の錦華小学校。12歳のときに関東大震災にあつて、お母様がその後亡くなられます。16歳のとき、石版画工の道に入ります。21歳のときに文芸誌の「新進芸術」の刊行に関わつて、何と喜多川さん、詩を書いていらっしゃいます。その詩は、今、展示室で展示をしてあるので、もしご関心があれば読んで下さい(口絵69)。1934年(昭和9)、23歳のときに本格的に凌雲閣関係の資料収集を開始します。考えるに、文学の道は諦めて歴史研究の道にこのとき決めたのかなという感じがするんですが、24歳で千代田区淡路町で画版業を営みます。独立したんでしょうか。25歳のときに石倉アサさんと結婚し、26歳のときに「大東京風俗資料研究会」という東京の歴史を研究する会を主催されます。その後、お子様が生まれたりして、研究会も続けて行かれて、ずっと充実した生活だったと思うんですけども、1945年(昭和20)空襲によって収集した資料を失ってしまいます。そして、敗戦後、また一から資料を収集し始めるわけですが、1952年(昭和27)には妻のアサさんが亡くなられます。その後、喜多川さんの動向が分からない時期が続くのですが、様子が分かってくるのは52歳のとき、「よもやま会」という浅草文化の研究会を開くころからです。敗戦後から50歳代くらいまでの実績が、喜多川さんが、どういうことをされていたのかちょっと掴みきれれておりません。1968年(昭和43)、この年は明治100年の年なんですけども、浅草寺で開催した、凌雲閣の展覧会に自分の資料を出品されます。このころから自分の持っていた資料を台東区やデパートでやる展覧会に貸し出したり、ご自身もその展示の企画などに関わり始めます。61歳のときには千代田区の文化財調査委員に就任して、63歳の時に「千代田郷土の会」というのを発足させます。喜多川さんの研究の形としては、仲間とこういう研究会を開いていくというのが一つのパターンになるかと思います。1975年(昭和50)には台東区の郷土資料調査員に就任します。1978年(昭和53)にはNHKのテレビ小説「おていちゃん」の時代考証を行い、このころからNHKのテレビとか、ラジオとかに、しきりに出演されています。そして、75歳で亡くられるという一生になります。いままでの話で、気づかれたと思いますが、喜多川さんは、大学に入っているわけではなくて、また大学で教えたというわけでもなくて、民間人として、資料を収集し、研究を行っています。大学とは違うエリアで活躍する民間研究者ということが言えるかと思います。

4. 図書・雑誌

喜多川周之コレクションの中には7,700冊ほどの図書・雑誌があります。一部を図書室で閲覧することができんですが、それらは、敗戦後、喜多川さんが一冊一冊古書店で集めたものと思われます。つまり、一冊一冊喜多川さんが、自分の関心事に沿って選択したわけで、その図書・雑誌を見ると、喜多川さんの関心事項と言いますか、頭の中が透けて見えるような感じがします。この図(口絵P.18)はその図書・雑誌から書いた喜多川さんの関心事項の図で、当館図書室の司書の楯石もも子さんが作った

ものです。関心事項は、凌雲閣から、浅草へと広がりますし、関心事項もこう、芋蔓式に、広がっていくのが分かります。これもお配りした資料の中にあるので、後で見ればと思います。

5. エフェメラ

最後に「エフェメラ」ということについてお話をします。余り聞き慣れない言葉だと思うんですが、長期的に使われたり、保存されたりすることを意図しないで作成される印刷物や筆記物のことです。パンフレットとかチラシとかメモ類のことで、普通の家にあるものです。大体1週間もすればゴミ箱の中に行くようなそういうもの。近年、それらのエフェメラを、博物館・美術館・図書館・文書館が、収集・整理・保存して公開を初めています。ただ、それらをどうやって整理するかとか、そもそも、それらにどういう価値があるのかとか、色々と課題を含んでいるんですけども、最近このエフェメラが注目されていて、実は喜多川周之コレクションの中にはこのエフェメラと言われるものが非常にたくさんあります。というのは、喜多川さんは大学や博物館などの組織に属していたわけではありませんから、資金的にもたくさんお金があるわけではありませんでした。コツコツ自分で集めるしかなかったのです。また、関心事項も庶民の歴史、浅草の娯楽の歴史ですから、いきおい、エフェメラのような、すぐ無くなってしまふようなものが収集の対象になるわけです。

少しですけども、そのエフェメラをご紹介しますと、こんなものがあります（口絵83）。喜多川さんがどこかの展覧会で凌雲閣の展示をして、その展示品の説明書きのキャプションと言われるものです。あるいは、喜多川さんが自分の資料を整理するために必要と思ってこう、作りかけた資料カードの案ですね（口絵85）。また、喜多川さんは、結局凌雲閣についての本を書かれなかったんですけども、その本のカバーの案が出てきました（口絵84）。本のカバー案ができるまで、話が進んでいたのかもしれませんが、こういうふうなものも展示してあるので、ぜひご覧頂きたいと思います。

6. 喜多川さんの浅草十二階

さて、それでは一番最後にですね、喜多川さんが出演されていたテレビ番組がありますので、それをご覧頂きたいと思います。これは、1978年（昭和53）3月2日（木）の午後7時30分から午後8時まで、NHKで放映された「スポットライト 浅草十二階盛衰記」です。

鈴木健二：さて、皆様。他人から見れば何の変哲もないものでも、持ち主のご本人からすれば命にも代えがたい宝物である場合が、よくあるものでございます。例えば、この煉瓦の破片もそうでございます。一見致しますと、色も古ぼけておりますし、またここにこうやって石が混じったりしておりますが、実は、この煉瓦はどこにあったのかと申しますと、ご覧下さいませ。ここに「浅草凌雲閣 明治23年 1890年」と認めてございます。これぞ正しく、今から88年前、東京は浅草に建ちました、我が国超高層ビルの第1号、いわゆる「浅草十二階」を建てました、330万個と称せられる煉瓦の、その忘れ形見で

ございます。

鈴木健二：喜多川さん、あたくしはですね、浅草と隅田川を挟みましてこちら側の、本所で生まれ育ちましたんでございますよ。

喜多川周之：あ～、そうですか。

鈴木健二：しかし、あたくしの兄が震災の年に生まれ育ちましたんでね、あたくしは震災を知らないんでございますが、お小さいときはしょっちゅう、このアレですか、浅草へおいでになってたんで。

喜多川周之：行きましたねえ～、神田に住まいしてまして、歩いて行ったもんですよねえ～。

鈴木健二：そうですか～。

喜多川周之：で、まあ、そのときにこう、頭へこびり付いたのはやはり十二階でしたねえ～。

鈴木健二：そうですか～。

喜多川周之：それは、神田の明神様の高台から見てもですね～、「あ、ここが浅草だよ」っていうような道標のようにそびえておりましたからねえ～。

鈴木健二：なるほどね、ええ。また子どもの頃にもこの高いものを見るというのはですねえ。

喜多川周之：そうですねえ～、それで何って言ったってこれは浅草のシンボルであって、それで東京の名物であって、日本でその頃一番高い建物ですもんねえ～。

鈴木健二：そうそう、そういうことですね～、ええ。

喜多川周之：あたしらは親父によく言われましたねえ～、「人間ってやつは志を高く持つんだよ。あの十二階へ上ったような気持ちにな」なんて言われたもんですがねえ～。

鈴木健二：なるほど～。で、この煉瓦はどこから掘り出されたんですか？

喜多川周之：いや、これは十二階が崩壊して爆破された後のこの破片を、この～、その場所からこの掘り出してきたんですよ。

鈴木健二：はあ～、十二階っていうのは見当としてはどの辺に建っていたのですか？

喜多川周之：あ、今の六区の興業街の北の突きあたりですがね、あの辺り小さな飲食店がいっぱい肩を並べているんですけど。まあ、330万個の煉瓦を爆破したんですから、欠片はあちこちに飛んでるわけですね。まあ、たまたまその1つ、2つというわけなんでございますねえ～。

鈴木健二：はあ、なるほどね、ええ～。しかし、まあねえ、こういうものを掘り出して、今お持ちになっていると、十二階っていうのがね、改めてこう、思い出せますでしょうなあ～、ええ。

喜多川周之：まあねえ～、子どもの頃、このてっぺんへ上ってねえ～。望遠鏡を貸すおじいちゃんが居ましてね、ちょうどあたしと同じ年頃のおじいちゃんだったなあ～、「坊や、アメリカが見えるよ」っていうんですねえ～。

鈴木健二：(笑) なるほど。

喜多川周之：望遠鏡、確か2銭でしたよ。すると、確かに岸壁が見えるんですよ。

鈴木健二：はあ～。

喜多川周之：それで、あたしはそれアメリカだと思ったら、いや品川のお台場なんですよ。

鈴木健二：(爆笑)

喜多川周之：でも、あたしはそのときに「ホントかな～」と思いましたね。

はい、この辺で終わって下さい。ほんの少しですけども、喜多川さんを見て頂きました。次に話して頂く小木曾淑子さんは長年喜多川さんと、調査・研究を共にされておられたので、喜多川さんの姿を見られて、懐かしいと思われたと思うんですけども、小木曾さんには、喜多川さんの思い出話などもして頂きますが、喜多川周之コレクションを考える上で非常に大きなヒントを与えてくれると思います。それでは、私の話は終わります、引き続き、小木曾淑子さん、よろしくお願いします。